

## 第二節 古代・中世



図103 干拓前の鏡潟



図102 遺跡の位置  
5万分1地形図「弥彦」

おおしまほし  
大島橋遺跡 西蒲区矢島

大島橋遺跡は、旧巻町の東方にかつて存在した鏡潟の北西部縁に位置する。昭和三十五（一九六〇）年に行われた鏡潟の干拓に伴う飛落川とびちがわの付け替え工事の際に発見された。当時の工事関係者の話によれば、湖底の数メートル下から土器の破片などが見つかったという。遺跡の内容や範囲についてはよく分からないが、越後平野の地下深くに埋没した遺跡があることが確認された早い時期の事例である。

図一〇五はカマドに甕かめなどを架ける時に支えとして使う土師器質の支脚で、この場所に集落が営まれていたことを示している。出土土器には、土師器では食べ物盛り付けるための鉢や高い脚の付いた高坏たかづき、煮炊きに使った甕があり、須恵器すえきでは水や酒を入れた瓶へい、坏つぎの蓋ふたなどがある。これらの土器は、器形などから見て、おおよそ七世紀後半のものである。市内では、この時期の集落跡



図104 土師器（左3点）と須恵器 左から甕・鉢・高坏・坏の蓋・瓶 左端の高さ14.5センチメートル



図105 支脚 右端の高さ8.6センチメートル

陸部の微高地が本格的に形成され始めたことや、律令国家の成立によって従来の体制が変化したことなどが関係しているのかもしれない。

大島橋遺跡の集落に人々が暮らしていた七世紀という時代は、越後平野に「淳足柵」や「磐舟柵」が設置され、日本の歴史の中で新潟が脚光を浴びる時代である。大島橋遺跡は、当時の社会の様子を考える上で貴重な遺跡である。

はほとんど見つかっていない。

山谷古墳の眼下にある御井戸B遺跡は（五ページ参照）、古墳時代前期に地域の核となった大集落であるが、古墳時代後期（六世紀）以降は遺物がほとんど確認できなくなる。この時期、人々は生活の場を大島橋遺跡のような内陸部に移したとも考えられる。原因は不明であるが、内